



3776  
4

昭和二十六年  
二月十三日

花洛羽津根巻目録

鳥爰名

五十八ヶ村

中郷の惣社を菅仲社と略し、中郷と由依の街を田中社、三河の山を菅社、甲寺河平郷を河平社とす。

紀伊郡

二十三ヶ村

日輪社共三ヶ、菅社共三ヶ、中郷社共三ヶ、由依社共三ヶ、菅社共三ヶ、河平社共三ヶ。

宇治郡

廿七ヶ村

山科を菅仲社、石田社、柳を菅仲社、菅仲社、菅仲社の社共三ヶ、菅仲社の社共三ヶ。

久世郡

廿二ヶ村

巨掃社共三ヶ、丸太金堂、菅仲社共三ヶ、菅仲社共三ヶ。

綴轟形 了仲社又光七丁 了又  
了会社并丁 田心山 世丁  
四十五ヶ村

相樂形 梶多又又光七丁  
了田心会社并丁  
七十ヶ村

乙訓形 関戸の形 世丁 了又  
了会社并丁 了又  
四十五ヶ村

葛形 西度会社并丁 了又  
了会社并丁 了又  
六十八ヶ村

八形合 三百六十八ヶ村

神社之部

○上加音社 是宮形 山山林  
社形 二子七音祭

本社別雷皇太后神宮ふして

王城の法守より山城の山宮一

の宮を移して平安城遷移す

己未法座のりりり

末社數十座あり事繁り九

略之毎年四月中の酉の日

葵祭とて勅使ありそは庄

歳重く大祭なりとてさへ守

。五月より日数あり社人祭

ありて勝負を分つる物のま

後山をふ守又毎子六月晦日

水世月の社とて後崇あり又皇  
御も五宮本橋本の社とて五宮  
崇平山東方の社とてとて信ふ

○流本社 上か養翼の方七十あり

流本の社とてありか後小属

○貴布祢社 社竹格二石

此の社二座宵一高露社  
宵二別雷の社ありは昔

いざらだの令十柱の宮とて  
軒過実を水て三股と云ふ

一は高露と云ふり是れ  
きと四社あり雨をこひ又

雨をさしりふり此社を祈り

小砂あり又まぬいりせのたて  
守護ありふりふは保小福法

の社もいふ又形中と云人信  
て除給といの事社教あり

要の社とて八丁と云り入とむれ  
ふありある社ハ社祀あり

○午頭天王社 まねの西中下 玉田村あり

○鞆社 鞍馬山樓門中下 あり

多あり大己貴命 朱雀院乃  
ゆり天慶年中の勅詔あり

社位正一位大少社いひり世工

發効のよにハ勸をこの社より  
かゝるおふ社号とらるり例案  
九月九日あり

○細川社

右日不傳の谷あり

信くして此祭社ハ細川邊元  
祭法を傳へ魔法と得らる  
ふらふおあり

○石上社

右日不あり

○梶取社

二の瀬村のやあり

祭あり口訣神祕なりまき船の  
社より屬と

○山の神

二の瀬村のやあり

おふ山の新と秘するまき船  
ありありありハ大山祇社と  
おありもの例案三月廿二日

右中村あり

○粟徳辨才天

天女の像ハ弘法大師の化して  
永享二年九月九日辰村中の  
民人靈と感と感とありて  
のら社檀とありそお事後  
無きれハ時と

○神明社

右日不

○立田社

右日不

○しづはら 醉原社 勧修寺東南にあり  
上加谷の末社なり毎年  
正月中の酉の日祭事あり  
此の祭事ハ世にあり採玉の事

井田村にあり

○えび 江文大石神

倉稻魂命と名ありいづれも  
その清子なり例年三月三日  
神楽二基あり大原郷中  
の民人の老翁神事あり

右日村後山にあり

○か 火壺雨壺風壺

上古より此号あり山乃自然  
の三窟ありて石の蓋ありて人

雨乞<sup>き</sup>祈<sup>い</sup>新<sup>あらた</sup>穀<sup>こ</sup>とくふ感<sup>あま</sup>意<sup>い</sup>ら  
おろし此地魔<sup>ま</sup>雨<sup>あめ</sup>なりとて人  
怖<sup>おそ</sup>れをもち

岩倉西面の山にあり

○いしざ 石座明神社

石あり此<sup>いし</sup>座<sup>ざ</sup>をりて法<sup>ほ</sup>を  
とくし是天神の御<sup>み</sup>なりとて  
此の座ありとて傳<sup>つた</sup>へ神<sup>かみ</sup>傳<sup>つた</sup>  
洋<sup>やう</sup>々<sup>々</sup>と

○一言全の社

東福門院の皇女女三の宮の  
許<sup>もと</sup>ありて言<sup>こと</sup>を  
ふあり

○八幡宮 寺名ありあり  
此の寺の大神ありて惟喬親王  
の御孫ありおそれ例年八月  
十五日一二のち居の宮にを  
行はせり

○陰山社 口ありあり  
社記未考 毎集九月九日

○午王社 口ありあり

○弁才天社 花園村あり  
例年九月九日お祭り

○姫官 橋林村往還の西の宮  
あり

ありあり文の村妻あり

○例集三月三日

○勝子社 橋林院の西の方山の村  
あり

和分若菜の勝子神社の同社  
橋林院ハ古く唱名お祭  
世に大正儀といふ昔良忍文  
寺にお祭りする所勝子神社の  
お祭を足る此時の村一人の  
寺にお祭りして託宣ありて  
大正山よりして良忍の法  
を承後よりして故ふる男  
の御孫ありあり

○今官 上野村あり

傍ふ松の古木あり 是別  
惟喬親王を祀りしところなり  
○日下南の方田地の字子沙雲  
内とつゝあり是親王の園居  
の旧地なりと云傳ふ

夫背東山の下あり

○天神宮

菅公の沙美法性坊の円形  
乃室ふ入々せられそ急の  
沙美ふ叶々として柘栲を  
て妻戸不投有わふ小種火成  
く燃しこと世人のまらぬ  
その後沙雲を法とて天満天神  
の号を授けし作の縁なり

そ急の効法をり例系  
四月廿神楽二基あり一基ハ  
八王子の神楽なり。そ急の額  
天は宮の文字ハ竹内所つる乃  
筆なり

右向天は宮の異の方

○八王子社 二河斗山後なり

おあり日吉社の八王子の神  
日吉のおれふ此里の七氏八王子  
の神楽を昇りて故ありなり

○日吉社 右月あり

毎年四月中の申の日日吉  
の日ハ御村の七人天神の社



集り南社に詣りまゝ山  
を紙に敷き板敷の清殿の  
神楽を舞ふ古例あり

○聖の清前 右目あり

日吉の聖真子ありて正哉  
五勝の尊あり

○源右夫官 右目あり

宮簀姫の父尾張の連行基と  
あるところより契田の神乃  
末社ありゆのゆかり勧誘せ  
しるを初祥あり

○辨才天社 比叡山金剛寺各  
あり  
糸あふぬ竹生信の辨才あり

○高野社 たふ北村東の山下  
あり

早良親王とある例祭三月昔  
村中古老のその鳥帽子（そのり）多純  
ありて神楽を舞ふる神幸の  
たふて田畑豊川など道あり  
ありて神もたふすせれと  
るり神もたふすり道あり  
とれた神楽もくして歩行  
ありて一室あり靈應希代  
の例あり

○金山社 古くあり  
搦手の社ありて  
内裏ありしを享保年中  
此地に移さるるなり

○津蔭社

下加茂の社也、素戔の地にて  
上加茂の社の生ありて毎年  
に月中の午の日内裏より  
恒例祭ありて式嚴重ありて  
下加茂より社務祈官あり  
祭候しき者ありて下加茂  
乃社降幸あり

○赤山明社 陸奥信村の山

天台宗の護法社ありて  
大師入唐の初は信山にて社  
形を現し護法のこと誓約  
ありて後由緒の所在あり  
なりし社也大師の遺徳ありて  
そは信村社を勧誘せり  
赤山と云ふ震旦の山の名あり

○八大天王社 一三寺村あり

おろし社祇園三堂の中八王  
子ありて例ありてなり

○天王社 新井村あり

一、多々村ハ大々を以て同社也

○天神宮 白川村南山より

此所の天神御天神ノ天神宮の  
額思ふ尾道天皇親王の御  
撰社也之

○十福原社 此所浪岡の前身あり

瓊々杵のそく日々ふハ此所の  
社あり社号詳す

○大豊大回社 麻う谷

此所の社乃天王の御例也  
九月九日

海東水

○下賀茂社 社領五百四拾石余  
此所の社乃西二殿あり此所の  
社東ハ大己貴命西ハ玉依姫之  
法皇の御神祕也

此所の社乃小社也の社乃移を  
上賀茂の社日ヤ賀茂社也  
必先此社と知して本社あり  
こと恒例也

橋門の中より此社の  
法の本をま納して裁り  
格とす

此所の社乃此所の社也  
此所の社乃此所の社也

く介振社事社殿ありこれハ  
略之。例年正月晦の日の夜に  
正月の社より歳をまわす。

古月あるをめぐりて今も社  
し一社あり此る夕宮神  
紀の細路とて林間小庭を設け  
ゆも流の井より清く清泉を向  
終の社あり。四月は葵祭の式  
上の節子同じ初 初夜高社  
と華らりて次上の夜へまわ  
。まわして下敷を首とまわ  
か下上の社とまわす。

○慈野権現 法皇御遺徳を  
あら

後白河法皇紀年慈野より高  
子もあふゆをててをたす  
此宮初社ありて大社あり  
者仁のそ紀不滅亡しそ  
今の社建社社境内  
とも樹木繁茂して  
細路より宮より地あり  
四月の日のそは社の物も  
とまわすのそはのそまわす  
宮あり

○吉田宮齋場所 社名の首の者  
は和天皇の御宇貞觀二年  
中細を山麓の御侍と

又ハト部鳥延の造りしり  
本殿ハ八角ありて芝居なり  
額字 日本最上日高日宮と  
ありハ修海帝の清書なり  
を介額ありしりハ本殿に  
本殿の造りあり額元本ハ  
神殿の字ハ修海門尾の書  
なりしりありてハ神祇なり  
ありしを改めしりハ本殿  
ありしハ本殿のあり日本國中  
也修海神ハ城ありて對馬國  
ありし國名を改めしりハ  
す是れハ本殿の地産をありて  
修海神ハ他也たらしめし

四宮外宮ハ八幡殿の左あり  
あり 吉田殿ハ本殿の西あり  
本殿殿ハ日宮の西あり九  
日ハ本殿中社日宮位之事ハ  
吉田殿 祇園ありしり。  
本殿殿 吉田殿の西あり神  
祇園ありしり日宮ハ吉田殿の  
社目数多あり

右日あわの方あり

○春日社 社目十三石  
本社ありしりハ日神ありて  
本殿ハ中山修海に建らしり

○西天王社 本殿ハ本殿の西あり

此社ハソノノミテ後度ノ杜ノ  
傍ニアリシニ後年ニ至リテ  
多クハ不<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>梅<sup>ノ</sup>ハカ<sup>ニ</sup>ヨ<sup>リ</sup>モ  
左<sup>ニ</sup>モ<sup>レ</sup>主<sup>ト</sup>アリ 例<sup>ニ</sup>モ<sup>レ</sup>古<sup>ノ</sup>言<sup>ニ</sup>  
神<sup>ノ</sup>與<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>基<sup>ニ</sup>籍<sup>ノ</sup>ノ<sup>レ</sup>深<sup>ニ</sup>感<sup>ニ</sup>神<sup>ノ</sup>信<sup>ニ</sup>  
アリ

西天王のまゝあり

○ 木風社

祇園年以テ主<sup>ト</sup>始<sup>ル</sup>木<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>  
現<sup>レ</sup>シ<sup>テ</sup>今<sup>ニ</sup>モ<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>木<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>  
と<sup>ク</sup>同<sup>ク</sup>木<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>ノ<sup>レ</sup>名<sup>ヲ</sup>マ<sup>レ</sup>ル<sup>ト</sup>モ<sup>レ</sup>  
四<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>ハ<sup>レ</sup>祇<sup>園</sup>社<sup>中</sup>ノ<sup>一</sup>也<sup>ト</sup>  
ソ<sup>ノ</sup>例<sup>ニ</sup>モ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>カ<sup>ニ</sup>ヨ<sup>リ</sup>モ

○ 東天王社 中島寺村

此<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>天<sup>皇</sup>例<sup>ニ</sup>モ<sup>レ</sup>九月  
十<sup>七</sup>日<sup>ニ</sup>テ<sup>ハ</sup>神<sup>皇</sup>御<sup>遷</sup>  
座<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>行<sup>ハ</sup>ル<sup>ト</sup>一<sup>ノ</sup>河<sup>潭</sup>ノ<sup>上</sup>  
ニ<sup>テ</sup>泥<sup>塑</sup>ノ<sup>大</sup>尊<sup>ヲ</sup>形<sup>シ</sup>シ<sup>テ</sup>  
之<sup>ヲ</sup>定<sup>メ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>テ</sup>古<sup>ノ</sup>言<sup>ニ</sup>ノ<sup>レ</sup>は<sup>ト</sup>  
村<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>崇<sup>メ</sup>之<sup>レ</sup> 元<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>感<sup>ニ</sup>神<sup>ノ</sup>信<sup>ニ</sup>  
神<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>ノ<sup>レ</sup>也

○ 文子天神

中<sup>ノ</sup>河<sup>門</sup>度<sup>ノ</sup>沙<sup>新</sup>形<sup>アリ</sup>テ<sup>ハ</sup>河  
邊<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>初<sup>メ</sup>カ<sup>ニ</sup>ヨ<sup>リ</sup>モ

○ 松河権現

此<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>古<sup>ノ</sup>言<sup>ニ</sup>ノ<sup>レ</sup>は<sup>ト</sup>

山宮使天皇 那智山の宮に於て  
梯はして切きつたをあとて後  
多持尾たもちおを氏將軍うぢしやうじんに  
多おんん 大信おほしんの言ことを  
るる居い居いとらふ寸すん一いつ五ごを  
い六む別べつ能のう野の形かたち言ことりる事こと  
を昔むかし 後のち白しろ河がふ宮みやおとりし事こと  
りりて盤ばん花はなの地ちをとりて神かみ座ざの  
るる舞まをとりて後のち酒さけりし事こと  
應お仁ののを乳ちふさ者もの座ざをとり  
管くだをとりて修しゆ験けんのの言ことをとりて  
本もと山やまのの存ぞん樂らくをとりて後のち後のち院いん  
の宮みや大おほ事こと入いののとりてしとしとし

○綾あや戸と明あ神かみ 後のちもも後のちもものの事こと  
二海ふたうみ山やまははららのの江え河が後のち人ひとをとりて  
年としをとりて同どうふふのの事ことをとりて  
酒さけをとりてほろりて後のちにに 事こと  
これこれをとりて後のちににのの事ことをとりて  
後のちににのの事ことをとりて後のちにに  
たたままににのの事ことをとりて後のちにに  
ああららわわるるてて大おほ相あららわわるる事こと  
後のちにに

○神かみのの宮みや 日ひのの事ことをとりて後のちにに  
法はふ和わをとりて後のちににのの事ことをとりて後のちにに  
ああららわわるるてて後のちににのの事ことをとりて後のちにに  
そそのの後のちににのの事ことをとりて後のちにに

京本源氏物語

おとどほる神託よりて再  
毎と一説ふる所の社とす

○ 諸羽の神 日のあのもやうなり

おあふふ天兒を根命 天を玉  
今年之二堂を法よりなり此  
社より東を四の宮河をふと  
りつらり例おあふなり

○ 天王社 修ふゆふ田取あり

感神後の神のまををぬる  
例歳九月をふるをた許板  
すゆらり雲田宮法中  
のなれらり此れこの申ふ

阿古<sup>ア</sup>古<sup>コ</sup>古<sup>ダ</sup>古<sup>ボ</sup>古<sup>コ</sup>とらりそを  
神宮<sup>カミ</sup>とす 旗<sup>ハタ</sup>の感神後<sup>カミ</sup>の  
の字あり

○ 梅宮 七日あそび後中  
あり

左梅宮とらぬる門の口ふ  
ありしに神ありと。此社境  
内ふゆるまき<sup>まき</sup>の<sup>まき</sup>とら  
少初あり<sup>まき</sup>とら<sup>まき</sup>の<sup>まき</sup>  
新<sup>あたら</sup>を<sup>あたら</sup>とら<sup>あたら</sup>あり  
り

○ 壱子社 七日ふ

修ふる所の社とす



人家の借方ありを存せしむ  
うほと

浄土の道徳の系

○祇園社 社名 百鬼夜行

天竺の如く云々して中央の  
天皇とありて八王子西の同福  
田形より聖武天皇の清和  
吉備大臣入道とて帰朝の御  
播磨の國廣峰ふ雲記の  
之後帝於宇後とてあら  
ゆ中今地ふは屋ありその  
世と夜神のたるとして  
かゆむと福とあるを良  
唐法中の男女まゆを記す

て六月を中野夜神をありし  
よりこれと年との祇園と  
つとと姑息り神樂の御  
八坂慶神屋とて寺の  
社名とてこれと云ふ  
照宣云夜神を云々せしめて  
神屋と云ふとてあるは  
遠くよりして祇園の  
名あり。信り神樂の  
社名ありて昔延久の  
本の堂を云々して  
られしふと云ふおま  
まを云々して止し  
。名を云々して

感神位とあり思ふに後を以て  
は親王の心でなく親戚等と  
いふに中政の幼少作を乞ひ  
賜成度物形ありてあゆみ人  
用巻。蘇民将来の社ハあ社  
中一の務社より 作云渡偏の  
の内人と弟の勝とを以てけさ  
蘇民の商ありて蘇民令博  
まんとすといひて學たを  
中一の務社より 作云渡偏の  
致あるれハ略之 六月廿七日  
祇園寺今山崎の形親あれの  
後式教寺より中世人の意あり  
ありて中政の月日廿七日十八日

清興流ひして祇園寺女教  
百人風流のあふて市中あり  
形を災繫又あふり一節と  
後偏あれの弟一とす。けづる  
の社事ハ毎子云親實の社  
天下安人等の所行積之と先  
法中より多法より中一の務社  
用るぬのを中を以て後し  
ゆりて家々ハ難者とたくを  
家例とすとも中政年扱多のあ  
さしハ略之也てあ社ハ中一の  
中一の務社より中政人等  
権のそを引やく中一の務社

○ 疲伏社 祇園西門外少堂  
 多々の疲伏社ありと又清和  
 天皇とあるもいふ詳あり  
 昔此社少て文皇上人の齋  
 して卒家と呪詛せし地  
 ありといふ

○ 山王社 口南少堂の西  
 つしやく處山の麓徒林少表  
 河解せし時ハ必山王の神樂  
 を振入りしり少を敷置り  
 されバ神樂を控置御山守と  
 保遊の比右のこく振入り  
 一少敷ふ町を控置御山

せしとありしを祇園の別處  
 不  
 小命をせし社入りしと云

○ 午王地社 口南中川東

祇園の神始降降の地されハ  
 此社を建凡祇園人少敷有  
 て多後より人必此社を信

安井能備寺中あり

○ 金比羅天宮

少中殿ハ 崇徳天皇 今皇比羅  
 移況 源三位親政を勧修寺  
 崇徳天皇 今皇比羅 同つ御ふ  
 して和光の慶を同つして  
 権後の子ありとたれをいふ

利生ワラビク一云れハ修験  
の終生日夜不安きを言ひて  
俗人の終る事

源三位の事云後ありまらる  
詳々ハ後考

○古神宮  
四宮を繩女の角

修治内川の淨律を勅詔一  
より知りり澄揚強くあれと  
云後考

○塙子社  
建仁寺門あり

ありり塙子命初このま後唐刺史ふ  
貞政の化りり建仁寺開山

常細修験入るて海潮の  
せの細風よあひとまらひし時  
此像をありてきりん老翁をのぞれ  
たりし建仁寺造立のとき  
社を寺内ニそとられし  
まらるて海門あり福あり  
高は源ハ福の神ありとて  
農工高もふそらして俗人  
多しあり九月十日又四月十日  
十月廿日多俗人山のごと

○摩利支天  
建仁寺中程在菴

和唐二年法師和るる云云  
終けい皇山の云をりてありこれと

安部一とてま多胡せり應後  
あつたつり信新らるゝの由

言部通社官門何ふ

○十程研社 古例人まの由

車止の社とも武名坊并度  
乃中へもよつてハ社地  
廣大のよりハ少初より  
為由釋るゝを程可考

○晴明社 古例何由

昔舟の地所の塚ありし  
所家の地面とをともて塚を  
中へ一平地とるとも好考快  
おもあつたつりてゝる社を建

幼信とて

松島通社并度何由

○業平社 古例何由の素

とよふ業平社社と幼信は  
信とつりて此代何某宮の由別業  
をりしつりてりてりてりてり  
又此の社とてハ大なる古樹の  
樹ありつりてりてりてりてり  
理れらるゝと信むるありとてり  
此社のも好人可考

信部通社并度何由

○地蔵院社

おふたの大地已を命とともま  
表に用付将るを表に文際大至

の像を安しきりしり  
弘仁三年正月延法河門の勅  
請り例を以て内なる神樂  
を經書堂の前に入しり  
是後亦を遷れりたり  
尚社のけり移りしり  
の比社の社堂を遷りて  
延法河門の勅を以て  
弘仁三年正月延法河門の勅  
請り例を以て内なる神樂  
を經書堂の前に入しり  
是後亦を遷れりたり  
尚社のけり移りしり  
の比社の社堂を遷りて

七日寺 寺相傳の事

○龍神社

弘仁四年正月延法河門の勅  
請り例を以て内なる神樂  
を經書堂の前に入しり  
是後亦を遷れりたり  
尚社のけり移りしり  
の比社の社堂を遷りて

弘仁四年正月延法河門の勅  
請り例を以て内なる神樂  
を經書堂の前に入しり  
是後亦を遷れりたり  
尚社のけり移りしり  
の比社の社堂を遷りて

弘仁四年正月延法河門の勅

○若宮八幡宮 社伝の事

古傳云、延法河門の勅  
請り例を以て内なる神樂  
を經書堂の前に入しり  
是後亦を遷れりたり  
尚社のけり移りしり  
の比社の社堂を遷りて

○三崎の社 古伝の小中松各  
 祭りの所傳豆國三崎の社乃  
 日御より又古社より松原の  
 社を合致し初詣と申す  
 古くは古社の氏子體を  
 社ありと云ふ

古伝の社

○新日吉社 町に古く奉り

永曆の中松原の日吉と極  
 古くあり慶保二年に月御の  
 こしりて新日吉を社と申す  
 より是傳よりしが寛仁の祀  
 不破壞してこそとありは社  
 と伝ははは是意歎五再云

古伝の社  
 古くあり今月  
 十の月あり今日古伝の社  
 所傳の社なり

○新日吉社 あり

傳延中後白河法皇紀古松原  
 松原の社なり今月  
 十の月あり今日古伝の社  
 所傳の社なり

りつたら法殿を築きまうりし  
高仁の御ふまのあふ同福寺  
を御奉りてを御傳尾の院  
宗播の院を御あり代々  
守りせり

○ 汲宮 新皇御の御あり

向山権臣の弟人の御ありし  
又天の蓋雲の御ありし  
より御代山間の平地あり  
御ありし御ありし  
古の御ありし御ありし  
より御ありし御ありし  
より御ありし御ありし

○ 滝上辨致天 汲宮ありし

りの御ありし御ありし  
御ありし御ありし  
御ありし御ありし  
御ありし御ありし  
御ありし御ありし

○ 滝尾社 御ありし

御ありし御ありし  
御ありし御ありし

○ 堀本社 御ありし

御ありし御ありし



神を祀りてあり人々の所は  
小陵の神あり

○田中社 三の所のあり  
あとの西より

おろし稲荷の神の敷地清く  
よふ古くはけ造一田の田  
中中社のより田中の  
社より又商人社又古殿社  
ともよふおれ稲荷日ありて  
神無又日

紀伊郡田中宮よりあり  
○稲荷行太の神 社名古き  
えの天皇の和州四年よりありて

此山隆隆しり弘法を伴ふ寺  
の門ありて稲荷行太の  
おろしを空願の丸  
さうばありて  
つらりの神の祀りあり  
始これよりおれ稲荷の  
の稲荷ありて稲荷の  
号又一は弘仁十四年といひ  
又この社のたを長修寺の  
ともあり。また稲荷社  
也之。二月初年の日法人  
ひりハ神移の枝を多し  
改まらしてありて古  
よもんありてあり

例年八月の上の卯の日神楽  
を奉りて九条の河原より  
出たていし奉りて大門を昇入  
令堂のよりふ神楽をよま  
るる神供をひよ載て里の  
傍にささげし供をいし  
一山のりたてふありし  
とふとていし奉りて  
海原を平中を奉りて  
てのふ増しし神楽の  
の奉りし神馬のり  
とて神馬のり奉りて

○七西の神社 梅原の町  
ありし一高古後の神ありし

古日蓮上人身延山開拓の時  
示現して永く奉りて  
一山のりたてふありし  
奉りて

○藤神社 社領あり  
ありし神ありし

舎人親王八天武天皇の御子  
天平寛字三年六月に  
崇道天皇と奉りて  
ありし神ありし

弓矢を常の八苦ある新王  
崇古の軍械を侏一即い  
とこの今風て誠天中を年の  
後あり。まはの月も昔古塚  
とあり御所崇古の古持の  
首若き息を御一極くしと

○岩倉神社  
岩倉山科大宅村

社記詳々しく御系九月の  
神皇之基あり

○雨社  
七百 幼修の月のあ  
往還のやあり

皇と幼修寺の祖神ありと  
あり

○種子八幡宮  
雨社あり

当社を種子八幡宮とて入  
りあり堤田松の古あり  
古風御所を極ふ極ふ松  
松の南ふ所後松の極あり  
とてふ今も宮あり種子の  
松あり

○長尾天神宮  
下野郡長尾村

長尾の天神天神あり  
八尾の天神の御所あり  
官の御所を長尾とて

け他より勧修寺よりより例  
祭九月九日

下野郡上野郡より

○ 清尾社 両方より

あ社より清尾社現く例祭  
九月九日より

○ 石田社 醍醐町の幸  
石田村より

天照大神 日吉山王のあ社より  
あ社よりひびく天照大神の祀  
志願下現く世あ神をいぬ  
あ社より水くあ社あ方  
あ社復志願くんと告終て云  
まより勧修寺よりより例祭

九月九日

紀伊郡佐水山の幸

○ 御香宮 社殿三百石

あ社神功后皇より 社を祀  
降くこと古豊左園桃山の城  
筑くい海城地の橋よりより  
あ社を志願谷のよく橋  
うああよりあ社あ町より  
社ああよりいれ又いれ  
橋よりより例祭九月九日  
。あ居のよああ水よりあ井  
あり例をひくいあより  
浦のあああよりああ  
あああ水を結とれあ

忽ち予念せしむらんゆふ  
浮名のみと号くこと

○金れ宮 伏見唐門河原

あまのよしののこ  
あまの御天古玉をくつ法を  
の記詳あしむ

○天王社 同前 坤八年

天武天皇の御宇を記する  
社記考 俗名九月十日

○巨掠社 久世郡小倉

春日大宮より社記詳あしむ  
俗名九月十日

○榎本八幡宮 あてしと 久世郡佐山村

石清水の八幡宮を以て治元年二月  
高村の橋氏の申す其古の申す  
しふらそ 胡巻をへてけ  
初信は又意保子中初を  
榎本一木の宮とてしむる榎  
氏とりつそま日とあつり  
例は九月の。或は社に木の  
乾あり

久世郡久世村

○久世神社 久世郡久世村  
延喜式社名姓を以て久世  
の社社を以てしむる社記

丁考

同中水のもまをてんをてん

○ 高倉宮霊社 あり

高倉宮の神は人の宮のまをてんをてん  
此の宮は高倉宮の神は人の宮のまをてん  
伊弉諾の世人をてんをてん てんをてん  
まをてんをてんをてんをてんをてん  
高倉宮の神は人の宮のまをてんをてん  
情をてんをてんをてんをてんをてん

高倉宮の本帳の里

○ 柳大明神 あり

柳大明神の祀又高倉宮の神は人の宮のまをてん  
式は高倉宮の神は人の宮のまをてん  
九月十五日あり

○ 梶原社 おと原村の村  
一丁半村あり

おと原村の村の神は人の宮のまをてん  
梶原社の神は人の宮のまをてん  
乃神は人の宮のまをてんをてんをてん  
やまのの神は人の宮のまをてんをてん  
うまのの神は人の宮のまをてんをてん

○ 涌出宮 目黒村の涌出の  
あり

涌出宮の神は人の宮のまをてんをてん  
但し神は人の宮のまをてんをてんをてん  
之和伎の神は人の宮のまをてんをてん

和伎ハ所地の号より和支と漏  
訓同一を不然るもの出入を度母  
神と次例を九月十八日

○天神宮 日相村系事  
あるは三浦神主人を母神次例  
を九月十日

○武内社 日南船守村の  
あるは武内大屋主人を母神次  
例を九月

○土田日社 日相村系事  
あるは土田日宮主人を母神次  
例を九月廿日

○かみ社 日南船守村の  
あるはかみの神初と初結の地事  
正装式おおまねる日相神社と云

日南船守山門の事

○浮舟宮 古くより  
あるは浮舟の神初と初結の地事  
とて借標の古樹あり

○離宮八幡 日南船守の事  
あるは石清水日神あり又  
一説あるは浮舟の文相と相門

退治の好思事の事より深く  
恨みのありて飲食を断てて  
を思ふ柳の奴怪をらぬの  
を思ふを寄らんたれに死に  
とらん 離宮の号は老道の親  
王の御ありしゆあり

るりらり

○ 柳の社

まことん

新編のまことん

一丁半あり

この社を考ふるに古文のまことん  
とらふまことんは傳子様の志  
古例あり

ちせのまことんの古例あり

○ 招熊の社

おろま招熊とあり一説にひく  
姫姫とあり女なりまことんの社  
神て生るるまことん鬼とあり人を  
悩まされたり招熊とありまことん  
まことん法りまことんまことん  
まことんありまことん

まことんありまことんあり

これと招熊とありまことん

○ 縣の社

あが

まことんの古例あり

おろま招熊とありまことん  
まことん又まことん  
まことん例ありまことん

招熊一巻とありまことん  
の供子とありまことん  
より招熊とありまことん

○ 神明社

まことんの古例あり

近き此の社 伊勢刺史社  
社殿傳子とありまことん



し付人にて其言ありし事  
しつて養はしとて勅信せし事  
と云

○大宮 後鳥羽天皇御田所

新宮の御田所の記詳なり所は信  
りふ土地ハ河原宮御田所なり  
の事初めて御号詳ふなり所例  
奉り月九日

○八幡宮 古所

郷中の一の宮と称して四ノ人  
の氏祀り例奉り九月廿五日

○天武天皇社 口之幡文の御  
又一説ありハ 田所を合を  
奉りし事なり詳なり

○伊勢向社 経伊勢院中御宮の所  
御名を合あり

皇太后天照天皇御神宮なり又  
石原宮の御田所の記ハハ幡文  
邊章の御田所なり伊勢向と  
号しと云此を代置中御宮なり  
依しと云ハ幡文の御田所  
小幡の上より水邊に御田所  
水邊にて居ると云ハ一と云  
古人を依り

之世初從小く乾上

○從姫社

おありぬ三坐中央從姫社  
子親肉供 西天社也  
此社は  
千部住所の初詣ありて此お由  
佐賀郡川上止女社を稱し  
多しとて例祭九月廿日

從長於八幡山一の巻居の  
内より

○八幡文河彦所

貞觀三子初詣道長より毎年  
放生今亦社與河邊幸す  
すは初又毎子西月十九日  
おて渡神と祭りよつて後方  
より宮女を初すあり十九日

まを群信と世よ渡神の社を  
よ六北うへ

八幡山よりあり雄桂山又

○神殿

社は子より後居余

おありぬ三坐神及三間ありて  
中間譽田天皇 胎中天皇 應作天皇  
人皇十五代仲哀天皇より四の  
皇子ありとあり玉依姫はれ  
神武天皇の御母あり 西のあり  
神功皇后ありて意神と名乃  
此母あり。八幡の神より古菟菜の  
字は八幡文 和名は藤原之社 祀  
ありしとありつくと。尚山  
河津屋の事より初詣三月廿日

ナリ和州大東の傳教教習  
 の遠望あり和州大東の字  
 佐八幡宮二ふ日余の能く大  
 教若及い大東位と種福しと  
 言の法住とよ納りたるふ神  
 を法住とまひかひて和州ふ  
 神化ありて皇城の南界山の宗  
 たるべしと教たまひ初教の三衣  
 ふとるの法住現しなり和州  
 初教ありて上座して四巻と  
 巻の中より六巻印感河の寸  
 遠し和州山小河法住ありし  
 と録する神教の末巻法住  
 唐大ありて他またらふし

神教書巻全の相をわけらる世  
 人好くそりあり例集八月  
 十日初教を辨く外云くま研  
 考向正して教をり又  
 志山の編並代にはあるし

○ まのやうら 神教のめあり  
まのやうら 神教のめあり

○ まのやうら 神教のめあり  
 教古伝連保をなある神皇とを  
 する良玉垂の命とあり

○ 神庫 本殿のまあり  
 神皇をぬりあり  
 和州中山内持社末社教多  
 あはれもあり

○ 天神宮 甲山のふもと 川口村あり

おろの天満宮を神とし博の中  
奇蹟のゆかりありて此の地を  
とてついでに九月五日

○ 開戸の神 乙洲の山麓のふもとあり

おろの地師考國土守の古き神  
ありていづれか山城の御守の由縁  
不明りしは昔に神なきなり  
此の地ありてはと別れなきなり  
聖なる神ありて

日山寺あり

○ 雜宮の傳言 社名七百有餘

おろの地師考國土守の古き神  
ありていづれか山城の御守の由縁  
不明りしは昔に神なきなり  
此の地ありてはと別れなきなり  
聖なる神ありて

○八王子社 山崎山の山王社  
 祭りの素戔尊を奉るの事ハ  
 子より 幼儀の記未考 神座の  
 際うらやの記云 古者三年再興と書  
 今不坊あり 俗名日月宮  
 神興三卷あり

○小倉の社 大倉の小倉の社の  
 祭りの事あり

額面正一位小倉大の社と  
 ある事ハ祭りの事考 社名  
 姓ハ乙訓即小倉の社とあり  
 社名 例祭日月宮

○神皇社 小倉の社あり  
 社名あり

延喜式に載る社の社名は  
 坐紀未考

○長岡天満宮 乙訓即神皇社乾四丁  
 祭りの事あり

菅公の社名は遠の河此社とあり  
 社名は有し 祭りの事あり  
 豊成社に於ては社名を慕ひ  
 社名はあり 社名あり 社名あり  
 ヤシを社名に 社名あり  
 社名はあり 社名あり  
 社名はあり 社名あり

○向白の社 乙訓即西の向白の社  
 社名あり

おあつねは伊予秘蔵うりごと  
うりごと  
鷹鷲羽音を合さるゝもろまき  
つとむ  
日下向ふ六月三日月讀余氏  
之う係業旧月中の辰の日  
布敷の南地をの神あり向日  
少部と号ス素盞鳴の孫古殿  
の神のつ子なりとふゆ向日  
ふらふ当社内とす

○乙訓社  
乙訓社  
乙訓郡伊予井内村

乙訓郡の四社之例の日月  
辰の日祭礼

○栢の社  
栢の社  
日下郡伊予井内村  
四丁あり

おあつねは伊予秘蔵うりごと  
向自の神の母神とてまよふて  
係未向自の神のおあつねの首  
より廿九廿百とふ六娘

○春日社  
春日社  
乙訓郡伊予井内村  
社以栢成石

おあつねは伊予秘蔵うりごと  
あつねは伊予秘蔵うりごと  
ありしとて社在降すは門外  
子部主社あり二のまろの  
美言ありおあつねの首ありて  
秘蔵ありとて

○城南神社  
城南神社  
伊予秘蔵うりごと  
あり

おありぬ七社ともいふ又三羽院  
とよみあともいふ例を九月  
廿九日あり

○天満宮 は初幸申の方幸寺白飯  
うり三平吉輝氏行  
左

おありぬ少登の社同御より  
お他ハ若草社ハの御代ありて  
別業ありし地より天仁二年二月  
廿八日若草社の若草あつて三日  
つおをさして社へしおありて海  
部よりしとこ。吉祥天女の社  
ありし若草若草の社は云卿  
入るして御朝の御秘風とあひ  
し御吉祥と女と初御し遂に

お他ハ御代  
ありしとこ

○結戸社 乙訓郡上之世村あり

おありぬ社に御代ありしとこ  
九月十九日之 毎年六月祇堂舎  
社無還幸の時 野を若草若草  
あつて若草子本代りの馬の社を  
首あけを馬まで社無のあ  
供とともそのあありしとこ  
弱のうらとあ社の社目のあ  
新うお供と御代ありしとこ  
御しと御代ありしと社のとこ  
いつお由縁ありしとこ

七字系権めりて

○月債正統所

おありぬ月債お社も同し

○徳友天神宮 太出徳のやま

○鞆原天神宮 徳友西下

太出社 徳友西下

○標谷社 徳友西下

お尾七座の中お社もあり

おありのやま三月末の己の卯

徳友四月末の日まで徳友の  
徳友あり

○お尾七座社 標谷の南中平年  
お尾七座社 社名お尾七座

お尾七座の西座ありお社

ありお尾七座の西座あり

お尾七座あり

○武河社 太社の西面

おの尾の尾社あり

○春日社 西座あり

おありぬお尾七座ありお社あり

おありぬお尾七座あり

○徳友社 太出



○三白社 三白社の御所  
三白社 御所

高社を登るの言を尋らすのありし  
伊勢の辨(ま)の居しを尋らし  
四時よりとて入りて後庭の重ん  
し月しとてお社の庭を尋らし

○梅屋

細尾社の御所

社名 御所

おろし酒屋 酒解社 大若子

社 小若子社 酒解子の社

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

伊勢の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

おろし酒屋の御所

梅屋の御所

杉のちちあつて式時<sup>しきとき</sup>忍<sup>しのぶ</sup>風<sup>かぜ</sup>ありそ  
老<sup>おきな</sup>杉<sup>すぎ</sup>折<sup>お</sup>りこれ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>休<sup>やす</sup>まふと  
木<sup>き</sup>の中<sup>なか</sup>より<sup>より</sup>保<sup>たも</sup>つ<sup>つ</sup>一<sup>ひと</sup>巻<sup>まき</sup>を<sup>を</sup>其<sup>その</sup>  
中<sup>なか</sup>に<sup>に</sup>保<sup>たも</sup>つ<sup>つ</sup>ありて<sup>ありて</sup>佛<sup>ぶつ</sup>舍利<sup>せり</sup>を<sup>を</sup>  
盛<sup>も</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>に<sup>に</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>と  
建<sup>た</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と

<sup>まじふ</sup>玉<sup>たま</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>埋<sup>う</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>  
予<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>屋<sup>や</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り

○月<sup>つき</sup>讀<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>社<sup>しゃ</sup> <sup>おん</sup>おん<sup>ん</sup>本<sup>ほん</sup>社<sup>しゃ</sup>より<sup>より</sup>南<sup>みなみ</sup>  
三<sup>さん</sup>丁<sup>てい</sup>二<sup>に</sup>五<sup>ご</sup>

おん<sup>ん</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>申<sup>まう</sup>り<sup>り</sup>ある<sup>る</sup>社<sup>しゃ</sup>ハ<sup>ハ</sup>おん<sup>ん</sup>  
い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>屋<sup>や</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き  
<sup>用</sup>用<sup>よう</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ハ  
い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>社<sup>しゃ</sup> <sup>おん</sup>おん<sup>ん</sup>  
社<sup>しゃ</sup>

○おん<sup>ん</sup>社<sup>しゃ</sup> <sup>この</sup>この<sup>の</sup>西<sup>にし</sup>二<sup>に</sup>東<sup>とう</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>カ  
い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ハ

おん<sup>ん</sup>社<sup>しゃ</sup>乃<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>お<sup>お</sup>ん<sup>ん</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>社<sup>しゃ</sup>あり  
系<sup>けい</sup>縁<sup>えん</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き  
例<sup>れい</sup>案<sup>あん</sup>九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>廿<sup>にじゅう</sup>日<sup>にち</sup>社<sup>しゃ</sup>ハ<sup>ハ</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>

十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>あり。昔<sup>むかし</sup>文<sup>ぶん</sup>保<sup>ぼ</sup>子<sup>し</sup>に<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>  
社<sup>しゃ</sup>に<sup>に</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>社<sup>しゃ</sup>に<sup>に</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>

社<sup>しゃ</sup>に<sup>に</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>續<sup>つづ</sup>

もはくそつらねむるのあま  
のいあもまをそつらふ

小倉社西二丁之末

○大酒の神社 産隆寺中を

産隆寺の法中にして異門指  
をひあつても又奉願皇の御神  
ありて仲意を皇の心うつり  
功徳を皇願の御神徳をうつ  
信しまつり

同より九月五日夜を奉本祭  
して是形のあつてうつりあま  
寺ありて古僧中又をうつり  
弘法のゆゆしうて寺の系  
あり

○木枯社

左桑門から氏の中

業河社と産隆寺へ近き所  
向りの社ありて木枯社あり  
向らひられは木枯社あり  
の樹のえを神妻をまつられ  
えのこころを神妻をまつられ  
を木枯と号するん

○車折社

下原塚村本町あり

ろ道の真宮をまつりて又  
法中を人形業の妻を御も  
今法高堂人儀の遠近あり  
やうある社ありてあり

わたりて至る成をれハ被るを  
借ふりてそとの如き是を列  
み道里及狹路をまゝの願を  
吾志を紀し今に流れとて  
遠く多うきをまゝとらうや

○野宮

小倉山巽あり

神の如く後にはくく河新  
伊勢の舞宮淨潔なる地  
草木の香花も華やかに  
の風流を遺す

たのまらむの多人のくく  
まらむ舞入りあはれはるも

○長門神社 二宮虎まつか

檀母皇后の尊厳をねんね  
とぞ。ち社を由二千日暮社と  
りあり緋の袴を収大門の赤  
木喜柳の社とありふを依  
をゆらぬらうきを檀母皇后  
御臨幸の御寵をよせ世の  
をさる人有り常々御座り  
ふくく心々世を観下らふ  
ゆきもや荒しゆきをたまひ  
して志慕を柳の人を新敷  
せらんらんきを舞をさうけ  
るる柳らんらんを舞あはれ  
小社をそとをなすを

止りぬを唯よりけしるふも  
四つあゆみ

冷西の所福まき村

○福生神社

おろの御降まじ御例系九月  
廿八りりり

若草初ま城の乾

○豊石山

お殿も石後現ハ行年母を  
そのむらひの  
史を屋長をくまのち代ハ  
将軍代をくまのち代ハ  
が岩ふりりしとま仁天をの  
河守あま山くまのち代ハ  
史後神をくまのち代ハ

西の方をくまのち代ハ

掃りありはくまのち代ハ

流るる河なりはくまのち代ハ

掃りありはくまのち代ハ

社ありまはくまのち代ハ

お殿ありはくまのち代ハ

の屋ありはくまのち代ハ

史後の社ありはくまのち代ハ

お殿ありはくまのち代ハ

なり又お殿ありはくまのち代ハ

とてお殿ありはくまのち代ハ

梅屋山くまのち代ハ

○春日神社

お殿ありはくまのち代ハ

のちてく人のまゝに傳ふ處まで  
馬てくまのまゝに傳ふ處のちてり  
てくまのまゝに傳ふ處のちてり  
傳ふ

首をたかや神の神

○ 藤原宗宮 わがまはれあり

幼ははれ傳ふく御つたてり  
女をそのまゝとてまゝに傳ふ  
例を九月十日

○ 惟喬社 日打あり

親王の御妻宗日白

○ 藤原宗宮 日打あり

おありの御妻宗日白

二片羽海神の翼の音

○ 通風社 杉垣あり

少の御妻宗日白

あまの御妻宗日白

も水鏡をこととてしそ又け  
池をそのまゝに傳ふ人研水

とてり

○ 菅原の社 日打あり

少の御妻宗日白  
例を九月十日

○ 三神社 全園のま 古くは行々あり

初位の記傳ありは此社のみ  
其本あり後移りてふりて  
けしは六あまのあまをいひり  
今もあまのあまのあまをいひり  
園りてふりてふりてふりて  
の古きおきし記傳ありてふり

○ 古傳の社 全園のまあり

又古所とも古傳傳うべ  
係系九力なる

○ 三丁の社 後乾平のまあり  
社ありてふり

ありてふりてふりてふりて  
ありてふりてふりてふりて

山内社の社傳あり 豊社あり

傳ありてふりてふりてふりて

法系 菅系 林原の社傳あり

例ありてふりてふりてふりて

の河 菅系 河の社とありてふり

ありてふりてふりてふりて

菅系 河の社とありてふり

河の社とありてふりてふり

灯をてふりてふりてふり

平野の社の記傳あり

○ 北野社 社ありてふり

社ありてふりてふりてふり

社ありてふりてふりてふり

社ありてふりてふりてふり

社ありてふりてふりてふり

天雨宮宮若若の所<sup>所</sup>よりとて  
世人よりあるれ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup><sup>の</sup>を<sup>を</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>を<sup>を</sup>  
ハて<sup>ハ</sup>所<sup>所</sup>より七月<sup>七月</sup>文<sup>文</sup>字<sup>字</sup>より<sup>より</sup>の<sup>の</sup>  
所<sup>所</sup>より<sup>より</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>右<sup>右</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>  
接<sup>接</sup>んと<sup>と</sup>又<sup>又</sup>は<sup>は</sup>右<sup>右</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>  
の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>より<sup>より</sup>後<sup>後</sup>に<sup>に</sup>大<sup>大</sup>目<sup>目</sup>の<sup>の</sup>  
少<sup>少</sup>多<sup>多</sup>一<sup>一</sup>不<sup>不</sup>相<sup>相</sup>知<sup>知</sup>を<sup>を</sup>生<sup>生</sup>ん  
と<sup>と</sup>此<sup>此</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>建<sup>建</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>最<sup>最</sup>除<sup>除</sup>と<sup>と</sup>好<sup>好</sup>子<sup>子</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>と  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>又<sup>又</sup>は<sup>は</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>を<sup>を</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
作<sup>作</sup>彌<sup>彌</sup>云<sup>云</sup>津<sup>津</sup>和<sup>和</sup>野<sup>野</sup>を<sup>を</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
と<sup>と</sup>後<sup>後</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
二月<sup>二月</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
七月<sup>七月</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>

今<sup>今</sup>より<sup>より</sup>所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
入<sup>入</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>

○ 七社社

所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>  
所<sup>所</sup>に<sup>に</sup>生<sup>生</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>朝<sup>朝</sup>日<sup>日</sup>



○大將軍社 大徳寺門前にあり  
勅修に傳りしに

○大工官 老客の社をさうのか

おまの社秘入の社に属す  
大工社を大工官の社と云ふに  
社亦大工あり

○今宮社 比小社あり

おまの社おまの社よりついで  
一多度之に唐の中華に社あり  
比亦毎小社を社と云ふに  
社の社を西多山の社と云ふに  
今宮と云ふに

本傳云平山ありついで今宮ハ

平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに

平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに  
平山をさうと云ふに

○み新八幡 中宮

み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに  
み新の八幡をさうと云ふに

大隅の西八幡 大のり所の別宮  
と号し 後柏原公の御孫とて  
是の院 是の宮をいひたまひしに  
は御孫とていひしと云

法陽寺の通名は法陽の院

○上御霊社 社名は法陽寺  
此所の御霊とてあり 早良親王  
修徳親王 孝康夫人 文皇  
楊子親王 孝康親王 吉田  
中雷社 あり 孝康親王の御宇  
天慶三子 孝康親王 法陽寺  
孝康親王 孝康親王 法陽寺  
例に七月八日 法陽寺 御宇  
法陽寺 御宇 孝康親王

かくて八月十八日 法陽寺 あり  
孝康親王 法陽寺 あり 孝康親王  
の氏神とて 孝康親王の御宇 孝康親王  
孝康親王 あり

上御霊社 あり 孝康親王

○孝康親王

ひうし 孝康親王 あり 孝康親王  
孝康親王 あり 孝康親王  
孝康親王 あり 孝康親王

孝康親王の御宇 孝康親王

○孝康親王

孝康親王の御宇 孝康親王  
孝康親王 あり 孝康親王  
孝康親王 あり 孝康親王

○柳の宮 宮河を柳葉の丸  
神の宮なり

社よりしてして其社をあれは  
て思を社ををり此代ひつふ  
伊勢のなまこの宅地くとも

たまの川の宮  
横の宮

○八幡の宮 横の宮

当社の八幡を社よりして  
をれ小宮を少社とらる切後  
降るる也

日本書紀卷四

○柳舟の宮

社は降るるに社の宮の傍り  
海川よりひきつれとを柳舟  
よ水居るるを宮の宮なり

大座の門をていてひきつれ  
を柳舟の宮

まの  
まの柳舟の宮の宮の柳舟

上東天神園子

○水火天神社

ひきつれ社ををり此代ひつふ  
とて雷火大雨を降るるを  
ひきつれ社ををり此代ひつふ

たまの川の宮

○石神社

石神を社に  
昔の石神を社に  
ひきつれ社ををり此代ひつふ

地少稀くして石律と崇新といふ

能登何のまじり明下

○安信明神社

いさくへ信明宅地中して別荘を築あり 年所傳うしむ

日くま下人原の表

○福左の神社

福左の神社と名あり昔は福左の御申中流を合ふ所なりと寛永元年申の地を福左

印水ふかふか入水

○福左の宮

天恩を神と初後とも初いふと云ふ御申なりし時天恩を神天

後よりなま日路の神作と号後地を福と

ふま後をふまを神の事

○信左の神社

信左の神社と名あり古石余後陽成帝御物とて御分御尾山信左り文福の御物とて御傳りありし事

ふま後を丸を向の事

○下御妻神社 社殿少石余

なありぬい所のほまなりて上のけま目社之例なり又自

○白山社

少額の白山社とて御傳り

年記傳より次たる記は新  
録成下之巻こそ新なりうらやま  
るや丁と白山をとり

揮少伝下より下へく書表

山他下 中山山所 日

婦少伝下より山十日

○沖所八橋 山他をとり金書入  
八橋町より

古里利お字は氏云の教令の  
地よりを針地の内へ 康永  
年より勅伝なりしとて あり  
鳳凰山 お持と号して むす  
際 ありも ありく あり ありとて  
伴の記を あり 沖所の号なり

つとくハハ産屋よりしとて あり  
堤月 あり あり

お持 あり あり

○津所社

その社の神は あり あり あり  
その寺 あり あり あり あり  
内書と あり あり あり あり  
よつて あり あり あり

あり あり あり あり

○送子社

勅伝 あり あり あり あり  
子 あり あり あり あり

○中山社

あり あり あり

おありぬ二座豊石嶺令  
寺石室令より歌のよみ  
石井太の律とりの例を  
中の申日あり

新所之東北角

○本所天王社

作元末考

○唐崎社 古角き中

右より向す

○後新社 古角後古角下  
古角側人家の表

右より向す

○神泉苑 伊他通古角  
池の中流小石龍王とあり

ひく乞下早冠の時法を  
天皇を奠池より幼伝

のひく乞よりあり古角  
寺趣感よりく永くは

幼伝あり又神泉苑古角  
禁苑のつみくは事の風

をくくは積地して伊他  
よりありくは形の

寺傳を流す路あり

○綿天社

おありぬ少を天王宮とあり  
古角社昔は古角殿の  
おありぬ中はより天宮を  
幼伝と。塩竈の社とて古角の







梅丸伝音の同結らり青糸  
のはと位傳の結信らり

そのくつ 碑并通ち近水

○ 園韓神

今ハハカス神

延生社式ト云園神一坐韓神  
一坐ト云ハ宮内者ト云  
大内裏の附の宮内省ハ大炊  
西門の小匣イダの箱あり延暦  
年中中モ名の記を此處を  
うつされし時付神と他所小  
移されんとせし小神伝らりて  
亦ハ西門ト云此の神記をモえ  
とらり付ありト云目者ト云は  
と大内裏堂上の好けあり

うつされらり

みま防門を西門度

○ 菅大臣社

和少ト云天満宮ト云菅原是信  
口の館の地ト云了西ト云路ト云延し  
かト云四代ト云延生ト云水あり。高  
塚ト云日ト云栞ト云社ありト云世ト云  
冷泉ト云ありト云切ト云信あり

菅原神小門あり

○ 北菅大臣

少ト云社ト云と天ト云中ト云のト云是ト云菅原  
の西ト云子ト云又ト云一ト云院ト云とト云名ト云をト云名ト云  
ともト云つト云りト云とト云れト云非ト云ありト云

○天通社 徳忠を奉る所  
日月の二神を奉る所

○杉本江原社  
社に細信傳を奉る所

○人麿社  
村中人麿を奉る所

紀伊之の初信を奉る所  
中津水より社殿へ  
柳の樹ありとほり  
修成の社殿と再興せられ  
よりとらふる所  
そのはらふる所

○福大明神社  
紀伊之の正冠の本儀あり

ゆきを奉る所  
ある所の儀ありて物あり

○みよあ天社  
白王大神あり  
桓武天皇平安城遷都の初  
造管あり  
古くより伝教  
弘法のあま師入る所の儀あり

多令海新所新をうける山は  
 又年々鬼一法眼と戦う  
 又或所坊と今令も亦法  
 陰月之とそそ此の境内は  
 やるへ一例年九月十日又毎子  
 十月所公六 白木小餅實船  
 を林お書々く結ばぬ糸流法  
 〇之年能は某と備官と初信

松多を信法何角

〇新玉付法

新玉付法  
 新玉付法  
 新玉付法  
 新玉付法  
 新玉付法

新玉付法  
 新玉付法  
 新玉付法

〇信成社

信成社  
 信成社  
 信成社

〇十九新法

十九新法  
 十九新法  
 十九新法

〇花修社

花修社  
 花修社  
 花修社

花修社  
 花修社  
 花修社

俳書沙牟と撰ふ

この後、鳥丸のりき守り

○ 白天神社 竹の辻ふま

社名詳す

百少路ふま

○ 神の社

上古の遠祖天皇の御令の  
地也る所伊勢大社宮乃  
遠祖所より神代より世  
々々社を建立す

社名何ふま

○ 朝日宮

天照大神を祀る西都賀院  
沙都に在る也之より丹波宮田

初定まけり此地と稱す例  
紫九月十日。境内様田度此  
社名あり又此地と稱すあり  
と初を考

みまの地所

○ 八幡宮

首途八幡とも又八幡宮  
よと貞観の中のも別して  
首の境内ありて殿ありと  
魏より一が平相國の地  
より少地あり

下河原の宮

○ 塩竈社

上原の宮あり  
當りの地守ありて殿の大也

鳥羽の信のふれはさしはる河平虎  
とありて要命ありて其の地電と  
うつし強信より改めるとせ  
てはるすては無せしれしを  
そはるすて改めとありて他  
河平虎の田代は古来松平殿  
をりしとあり

下河の東津経書の名

○市船の神 市中山  
信修と素妻と信修の婿神と  
そは又は少神體の鬼子母神  
のこしともは例ありて月  
十のり

○天満宮 市河の年々あり  
そは又は少神體の鬼子母神  
のこしともは例ありて月  
十のり

○文子天神 市河の年々あり  
信修と文子の少神體とありて  
編りしともは又文子感得  
の神修ともはり助信は初  
祥あり

○信修社 あり  
信修と信修の社と自神と  
獸肉と信修の社社の神  
信の信者ともはるしは信修

てしと云例を九月五日

○炬火こらこら 七のちが川ぬ

指舟の舟の事社より例年  
指舟の舟は社受の時七多川系  
して大船こらこらを焚くを例いひとん

○宇賀社 比南の多あり  
よ古大御冠とくま九条の地を福  
ア〜〜た此地多氏ある魚の  
雲化してウ賀と名をこ  
ウ賀多塚を建られ〜〜り  
ては社よりウ賀と名を

○福行社 油少生多指舟のち  
おふれ指舟の社の物伝あり  
伊藤工の社人田中氏代と云  
あり候と

指舟社のちい

○道徳社 指舟の社  
おふれ徳田まな命と云〜〜  
ある新河と云あり〜〜紀末  
考

指舟の社

○指舟神社 指舟の社  
指舟神社ある甚毎の正月  
中の午日小社受ありて四月  
初の卯日うさぎと云あり〜〜

いふふきしきふり

○古宮跡所 八幡宮の合意下の南にあり

古宮跡所ニ階を記すなりし  
て地を神と稱す臨宮云  
今此記を六本通中  
吾等もふ神とて地を  
物とす又昔ハ格行由社  
神奥の徳とすしと云ふ  
なり

○粟津社 河川の西生野原にあり

紀分河田の御宗を稱す  
御徳とすの事

例祭三月三日

○住吉社 十三年甲子にあり

松乃住吉より稱す御徳  
とすありしに記すなり  
此社住吉河田の事  
とす例祭六月廿八日

○八幡古社 五寺古中あり

御徳とすありし事  
建ありし事ありし事  
ありし事ありし事

古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社

古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社

古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社

古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社  
古井の社 古井の社  
又布衣の社 又布衣の社



予茲亦ハハ多ク言物ニシテ  
其の如海神ニ使主の地ありト  
シ

予茲亦ハハ多ク言物ニシテ  
其の如海神ニ使主の地ありト  
シ

花洛羽津根卷四

